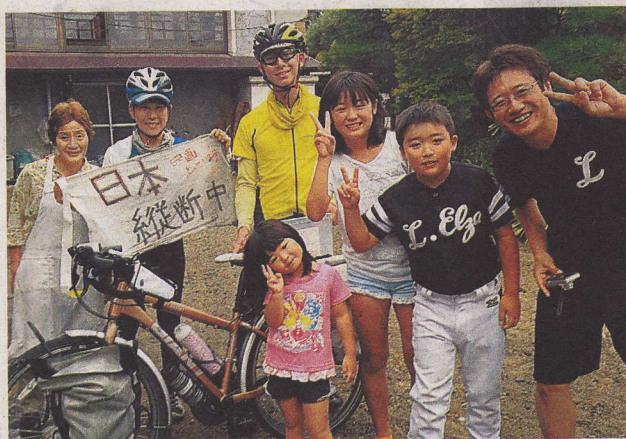


聞こえなくても 世界は広がる

聴覚障害の監督 自転車の旅、映画に

生まれつき耳が聞こえない映画監督の今村彩子さん(37)が、自転車で日本を縦断する自らの姿を映したドキュメンタリー「スタートライン」を撮った。テーマは、ずっと苦手意識があったという、他者とのコミュニケーション。東京都内で公開中だ。



「スタートライン」撮影中の今村監督(左から2人目)

名古屋市出身の今村監督。母親が妊娠中に風疹にかかり、音のない世界に生まれた。母は、相手の唇の動きから理解することなど、社会で生きていけるよう多くを教えてくれた。一昨年、その母が他界。映画を撮る気持ちがなくなるほど落ち込んだが、「もう一度スタートラインに立ち、前を向いて生きていきたい」という気持ちになった。

「壁をつくらずにコミュニケーションしよう」。苦手だった、人との交わりを旅の目的とし、映像に収めることに。昨年7月1日、沖縄から北海道の宗谷岬まで57日間、3824キロの自転車の旅が始まった。

出会った人は約300人。身ぶり手ぶりを交えたり、筆談をしたり。「人は優しく、信じてほしいんだと思う」と。一方で、集団の会話にうまく入り込めずに涙する今村監督の姿もありのままに映し出す。そんなとき、旅の伴走者で自転車店スタッフの堀田哲生さんが時に厳しく助言する。北海道で自転車旅をしていたウイルさんと出会い、考えが変わった。オーストラリア出身で、聴覚障害があるため日本語もたどたどしいが、誰にでも積極的にか話しかけていた。「私よりもハンディがあるはずなのに、自然に皆の中に入っていた。『私が聞こえないからできない』という考え方が自分を臆病にさせていたのだと気が付きました」

これまで耳が不自由な被災者を追った「架け橋 聞こえなかった3・11」といった聴覚障害をめぐる作品を手がけたが、今後は「聞こえない人」にこだわらず映画を撮りたいという。

「今回の旅でコミュニケーションは聞こえる聞こえないだけじゃないと知った。走り続ければ向かい風もあってしんどいけれど、世界は広がり得られるものもある。そんな背中をみせられたらうれしい」

映画は東京・新宿のK's cinemaで上映中。(佐藤美鈴)